フロストと思い遣り

Frost and Considerateness

山　津　さゆり
Yamatsu,　Sayuri

ABSTRACT

In this thesis, I consider five poems by Frost, which deal with considerateness.

In “My November Guest,” he depicts a poet’s considerateness toward his sweetheart who thinks he cannot understand her feelings. “To a Moth Seen in Winter” portrays Frost’s considerateness toward a moth. In “The Thatch,” his considerateness toward the birds in a ruined thatch is described, together with his remembrance of another thatch in which he once lived with his wife. In “Love and a Question,” a husband shows his considerateness toward his wife on their bridal night. In “Locked Out,” Frost describes his considerateness toward his child.

Ⅰ.

生きて行くのに，思い遣りの心を持つことは大事なことであろう。フロストはこのことについてどう考えているであろうか。いくつかの詩を取り上げて考えてみたい。

先ず“My November Guest”「私の十一月のお客」という詩を考えてみたい。これは１連５行で４連から成る詩である。

１連目は次の通りである。

My Sorrow, when she’s here with me,
　Thinks these dark days of autumn rain
Are beautiful as days can be;

She loves the bare, the withered tree;
　She walks the sodden pasture lane.[1]

私の恋人「悲しみ」は，私とここに居るとき，
秋の雨のこの暗い日々は
この上なく美しいと思い，
裸のしおれた木を愛し，
濡れた牧草地の小道を歩く。[2]

“Sorrow”は恋人の本当の名前ではなかろう。彼女が寂しい風景を愛し，風景の中に悲しみを見出すことに生きがいを感じているような女性だから，フロストが彼女を「悲しみ」と名付けたのであろう。

2連目は次の通りである。

Her pleasure will not let me stay.
　She talks and I am fain to list:
She's glad the birds are gone away,
She's glad her simple worsted gray
　Is silver now with clinging mist.

彼女は寂しい風景が好きで私を一緒に散歩させ，
話をして私はそれを喜んで聞く。
彼女は鳥たちがいなくなったのを喜ぶ，
彼女は自分の質素な梳毛糸の服の灰色が
まとわりつく霧で今銀色になっているのを喜んでいる。

3連目は次の通りである。

（1）Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost*（London: Jonathan Cape, 1972）6–7.　フロストの詩の引用はすべてこの版に拠る。

（2）詩の日本語訳は拙訳である。

The desolate, deserted trees,
The faded earth, the heavy sky,
The beauties she so truly sees,
She thinks I have no eye for these,
And vexes me for reason why.

わびしい，鳥のいない木，
色あせた土地，曇った空，
それらは彼女が本当に見分ける美であり，
彼女は私にはそれらを見る目がないと思い込み，
そしてどうしてかと私を責める。

最後の 4 連目は以下の通りである。

Not yesterday I learned to know
The love of bare November days
Before the coming of the snow,
But it were vain to tell her so,
And they are better for her praise.

私は雪の季節になる前の
物淋しい十一月の日々への愛が
かなり前から分かるようになっていた，
しかし彼女にそんなことを言うのは私の虚栄心を満足させるだけだろう，
そして十一月の日々は彼女の称賛によってよりよいものになったのだ。

フロストも十一月の物淋しい日々のよさがかなり前から分かっていたのだが，そのことを言えば，自分にしか分かるはずがないと自負している彼女が傷つくと思って言わないのである。彼女の自負心を察して気遣う詩人のこのような思い遣りの気持ちは美しいものである。

以下，同様に思い遣りの気持ちが現れていると考えられる４篇の詩，“To a Moth Seen in Winter”，“The Thatch”，“Love and a Question”，“Locked Out”について考察してみたい。

Ⅱ．

“To a Moth Seen in Winter”「冬に見た蛾へ」という詩は連に分けられていない24行から成る詩である。始めの９行は次の通りである。

Here's first a gloveless hand warm from my pocket,
A perch and resting place 'twixt wood and wood,
Bright-black-eyed silvery creature, brushed with brown,
The wings not folded in repose, but spread.
(Who would you be, I wonder, by those marks
If I had moths to friend, as I have flowers?)
And now pray tell what lured you with false hope
To make the venture of eternity
And seek the love of kind in wintertime?

まず手袋をしていないがポケットで暖まっていた手を差し出すよ，
森と森との間の止まり木，休憩の場所だ，
きらきらと黒い目をした銀色で，褐色をさっと塗ったような生き物よ，
休むために羽をたたんでいなくて，広げている。
(私が花を友としているように，蛾を友とするなら
お前はそのような印をつけてどういうものになるだろうか。)
それから今度はどうか言ってくれ，
冬に永遠の冒険をして同種のものの愛を求めるように
何がお前を誘い出したのか，希望を叶えてやる気もないのに。

森の中にいたと思われる詩人はたまたま蛾を見付け，手袋をしていないがポ

ケットに入れていたので温まっている手を，まず「森と森との間の止まり木，休憩の場所」として差し出す。蛾が羽をたたまずに休んでいるのを見て，詩人は，「私が花を友としているように蛾を友とするなら，お前はそのような印をつけてどういうものになるだろうか」と思う。つまりフロストは花を愛するように蛾を愛することが出来るだろうかと思ったのであろう。そして詩人は今度は蛾に，「希望を叶えてやる気もないのに，何が，冬に永遠の冒険をして同種のものの愛を求めるようにお前を誘い出したのか」，言ってくれと頼むのである。

引用の中の表現で気になるのは，最後から2行目の“the venture of eternity”「永遠の冒険」である。これは，自分の子孫を残したいという生き物の本能的な冒険のことを指して言っていると思われる。次に気になる表現は，最後の行の“kind”である。これは，「同種のもの」という意味であり，結局，“mate”「つがいの一方」ということを意味していることにも注意したい。

この詩の続きの7行は以下の通りである。

But stay and hear me out. I surely think
You make a labor of flight for one so airy,
Spending yourself too much in self-support.
Nor will you find love either, nor love you.
And what I pity in you is something human,
The old incurable untimeliness,
Only begetter of all ills that are.

だがここに居て私の話を終わりまで聞いてくれ。私は本当に思うよ，
お前は軽やかな体なのに苦労して飛んでいて，
体を浮かすことであまりに精力を使いすぎている。
だがお前が愛を見付けることも，愛がお前を見付けることもない。
そして私がお前のことで哀れに思うのはお前の人間的な所だ，
昔から治ることのない時を得ないという性質だ，

これが存在するすべての不幸をもたらすのだ。

引用の１行目の“But”は，詩人が飛び去ろうとする蛾を留めて，自分の話しを終わりまで聞かせようとして言ったものだと解釈すべきであろう。また，4行目の“love”は“mate”「つがいの一方」を意味していると思われる。

最後の８行は次の通りである。

But go. You are right. My pity cannot help.
Go till you wet your pinions and are quenched.
You must be made more simply wise than I
To know the hand I stretch impulsively
Across the gulf of well-nigh everything
May reach to you, but cannot touch your fate.
I cannot touch your life, much less can save,
Who am tasked to save my own a little while.

だが行くがよい。お前のやり方は正しい。私が同情しても役に立たない。
行け，羽を濡らして水の中に消えろ。
お前は私より単純な賢さを持っているから分かるのだ，
ほとんどすべてのものの隔たりを越えて
私が衝動的に差し出す手がお前の所へ伸びても
お前の運命に触ることは出来ないということが。
私はお前の命に触ることは出来ない，ましてお前を救うことは出来ない，
私には少しの間私の命を救う仕事があるのだから。

引用の１行目で，詩人は，蛾に対して，無駄なことをしているが，それでもよいのなら飛んで行くがよい，同情しても役に立たないのだから，と言っているのであろう。5行目に“the gulf”とあり，人間と蛾の間に当然ある隔たりを表しているのだが，途方もない隔たりであることを強調している。このことは，特に注意すべき，すぐ後の“reach to you”の解釈に関わってくる。“reach

you”ではなく“reach to you”であることに注意すべきである。“reach you”であれば「お前に達する，接する」ということなのだが，“reach to you”ということは，「お前の所まで，お前の近くまで，伸びる」ということなのである。それによって，途方もない隔たりを越えてお前の所までやっと伸びるということが表現されているのである。

引用の最終行では，詩人は，「人間はいくら長く生きても永遠から見ればほんの少しの間生きているだけだが，その少しの間生きるだけでも大変で，蛾の命を救うような余力はない」ということが言いたいのであろう。Robert Faggen は，この最後の詩行について次のように指摘している。

> He has much to do to save his own life. We sense this not only in the immediate, literal sense of how much he can withstand being out in the cold but also in some larger, unspecified sense in the world where others are dying.[(3)]

このような解釈もできるのであろうが，フロストがこのようなことを意味しているとは考えがたい。外の寒さにどれだけ耐えられるかということを考えているとするのではあまりに卑近な状況を扱いすぎており，また他の人が亡くなっていく世の中を漠然と考えているとするのではあまりに他人事のようでありすぎるのではないだろうか。しかし，Faggen がこの詩に関して，“It may be worth noting that Frost dated the poem ‘circa 1900,’ the year his son Elliot died of cholera.”[(4)] と指摘していることは重要であるように思われる。この指摘は，最終行の解釈をする上でも非常に重要で，私の解釈を裏付けるものとなると思われる。

因みに，*Robert Frost, Poetry and Prose* にはこの詩の全部は載せられていない。“Nor will you find love either, nor love you”という 1 行だけが載せられている。[(5)]

（3）Robert Faggen, *The Cambridge Introduction to Robert Frost*（Cambridge: Cambridge University Press, 2008）119.

（4）Faggen, 120.

この詩の中から１行だけ選ぶとすれば，“I cannot touch your life, much less can save”がよいのではないかと思う。寒い冬の森でたまたま見付けた蛾に暖かい手を差し出す詩人の思い遣りで始まるこの詩を代表する詩行であるように思われる。思い遣りでは命は救えないかもしれない。“My pity cannot help.”とフロストはこの詩の中で言っているが，助けにはならないとしても，思い遣りの心を持つことは大事なことである。思い遣りの心がなければ立派な人間社会は出来ないということを，フロストは暗示しているように思われる。

Ⅲ．

次は“The Thatch”「藁葺き屋根の家」という詩を考察してみたい。これは連に分けられていない，35行から成る詩である。始めの９行は以下の通りである。

Out alone in the winter rain,
Intent on giving and taking pain.
But never was I far out of sight
Of a certain upper-window light.
The light was what it was all about:
I would not go in till the light went out;
It would not go out till I came in.
Well, we should see which one would win,
We should see which one would be first to yield.

冬の雨の中独りで外へ出ていた，
苦しみを与え受けることに熱中していた。
だがある一つの二階の明かりが

（５）Edward Connery Lathem and Lawrance Thompson, ed., *Robert Frost, Poetry and Prose*（New York: Holt, Rinehart and Winston, 1972）423.

見える所から遠く離れることはなかった。
明かりが最も大事なものだった。
明かりが消えるまでは私は家に入れなかった,
私が入るまでは明かりは消えないだろう。
どちらが勝つか，まあ見てみよう,
どちらが先に屈するか見てみよう。

フロストは夫婦喧嘩をして，冬の夜，雨が降っているのに外に出たのであろう。この引用の中で，二階の明かりについての描写は注目に値する。

次の 7 行は以下の通りである。

The world was a black invisible field.
The rain by rights was snow for cold.
The wind was another layer of mold.
But the strangest thing: in the thick old thatch,
Where summer birds had been given hatch,
Had fed in chorus, and lived to fledge,
Some still were living in hermitage.

世界は黒い見えない野原だった。
雨は当然雪になり冷たくなった。
風はもう一つの土の層になった。
だがとても不思議なことに，厚く古い藁葺き屋根の家の中,
夏の鳥が孵化して,
一緒に餌を食べ，巣立った所に,
何羽かまだ隠れて住んでいた。

冬の雨の夜の情景や近くの家の様子について語られている。この引用の 3 行目は，「風はもう一つの土の層になった」と分かりにくい比喩表現で書かれているが，雪が積もった地面の上に，風がもう一つの地面のように冷たく吹いてい

たということを意味しているのであろう。

次の６行は以下の通りである。

And as I passed along the eaves
So low I brushed the straw with my sleeves,
I flushed birds out of hole after hole,
Into the darkness. It grieved my soul,
It started a grief within a grief,
To think their case was beyond relief —

そして私が軒に沿って歩いたとき
低いので私の袖が藁にあたった,
そのために鳥達が次々に穴から,
暗闇の中に出た。私の魂は悲しんだ,
悲しみの中に悲しみが生じた,
鳥達の状態は救いようがないと思うと。

近くの家の軒に沿って歩いていた詩人は，軒が低いために袖が藁にあたってしまい，そのせいで隠れていた鳥たちが次々に穴から暗闇の中に出るのを目の当たりにする。鳥たちの状態は救いようがないと思うと，詩人の魂は悲しみ，悲しみの中に悲しみが生じた。引用の５行目の“a grief within a grief”という表現は，意表をつくものである。一つ目の“grief”と二つ目の“grief”は，それぞれ対象が異なっていることに気づくべきなのであろう。つまり，前者は鳥に対するもので，後者は夫婦喧嘩に対するものと解釈するべきだと思われる。単に悲しみを強調するための表現ではないことに注意するべきであろう。

次の８行は以下の通りである。

They could not go flying about in search
Of their nest again, nor find a perch.
They must brood where they fell in mulch and mire,

Trusting feathers and inward fire
Till daylight made it safe for a flyer.
My greater grief was by so much reduced
As I thought of them without nest or roost.
That was how that grief started to melt.

鳥達はまた巣を探して飛びまわることも出来ないし，
止まり木を見付けることも出来ないだろう。
鳥達は腐葉土とぬかるみの中に落ちてふさぎこむしかなかった，
夜が明けて飛ぶ鳥にとって安全となるまで
羽と内なる熱に頼るしかなかった。
鳥達には巣も止まり木もないことを考えると
私のより大きな悲しみは大いに減じた。
そのようにしてその悲しみはなくなり始めた。

詩人は，悲惨な状況に陥った鳥たちを目の当たりにして鳥たちの苦しみを思い遣り，鳥たちのことを悲しむことにより，夫婦喧嘩に対する悲しみが全く取るに足らないものに思えたのである。鳥に対する思い遣りの心を持つことで，詩人は救われたのである。

この詩の最後の 5 行は以下の通りである。

They tell me the cottage where we dwelt,
Its wind-torn thatch goes now unmended;
Its life of hundreds of years has ended
By letting the rain I knew outdoors
In onto the upper chamber floors.

人の話によると私たち夫婦が住んでいた家，
風で痛んだ藁葺き屋根の家はもう修理もされないままらしい，

何百年も持ちこたえていたのだが

私が外に出ていて経験した雨が

二階の床にまで入って家の寿命が終わったのだ。

この部分を読んで初めて，詩人が冬の夜，外に出て，鳥たちが住んでいた藁葺き屋根の家を見たのは昔のことだったことが分かる。そして，あの雨の夜，明かりがついていた詩人夫婦の家も藁葺き屋根の家だったことが分かるのである。フロストは，その家が崩れてしまったということを人の話で知り，その家のことに思いを馳せているのであろう。それにしても，この詩の難解なところは，夫婦喧嘩から詩が始まり，鳥に対する思い遣り，夫婦喧嘩に対する悲しみの消失が語られ，最後になってそれらが昔のことであったことが分かり，さらに，フロストがその当時住んでいた家に思いを馳せていることが分かるという構造になっているところである。

この詩について，Katherine Kearns は次のように指摘している。

> In “The Thatch” the symbolic value of the abandoned marital house whose thatched roof deteriorates to let rain into the “upper chamber floors” can hardly be underestimated, as it suggests a correlative state of wounded disorientation in the man who has left it.[(6)]

Kearns はこの詩の最後の５行だけを問題にしているように思われる。この５行も大事ではあるが，この詩で一番大事なのは別の藁葺きの屋根の家に住んでいた鳥たちへの詩人の思い遣りの気持ちであろう。

Ⅳ.

次は“Love and a Question”「愛と疑問」という詩を考察してみたい。この詩は１連８行で４連から成る。１連目は次の通りである。

（６）Katherine Kearns, *Robert Frost and a Poetics of Appetite*（Cambridge: Cambridge University Press, 1994）10.

A Stranger came to the door at eve,
　And he spoke the bridegroom fair.
He bore a green-white stick in his hand,
　And, for all burden, care.
He asked with the eyes more than the lips
　For a shelter for the night,
And he turned and looked at the road afar
　Without a window light.

見知らぬ人が夕方玄関のドアの所にやって来て，
その家の新郎に丁寧に話しかけた。
彼は手に緑がかった白い棒を持ち，
荷といえば心配だけだった。
彼は口というより目で
一晩泊めてくれと頼んだ，
そして向きを変え遠くの道を見た
道には一つの窓明かりも見えなかった。

この引用の中で，冒頭の「見知らぬ人」という意味の語が，“Stranger”と大文字で始まっていることに注意しなければならない。全く見知らない人であることが強調されている。また，フロストが，この「見知らぬ人」が棒は持っているものの，旅人が普通持っているような荷物を持たず，強いて荷物と言えるものを持っているとすれば，「心配」という心の荷物があるだけであるということを，4行目にあるように，“for all burden, care”と表現しているところは，詩人の言葉に対する研ぎ澄まされたすぐれた感性が感じられる。

2連目は以下の通りである。

The bridegroom came forth into the porch
　With, “Let us look at the sky,

And question what of the night to be,

Stranger, you and I."

The woodbine leaves littered the yard,

The woodbine berries were blue,

Autumn, yes, winter was in the wind;

"Stranger, I wish I knew."

新郎はポーチに出て来ながら

「空を見て，

そしてこれからの夜がどうなるか考えてみようよ，

見知らぬ人よ，私と共に」と言った。

ツタの葉が庭に散らばり，

ツタの実は青かった，

風には秋，いや冬の気配があった，

「見知らぬ人よ，分かるといいのにと私は思うよ。」

新婚初夜に人を家に泊めるということは，その人が見知らぬ人でなくても，出来ることではないであろう。新郎は家の中にいるまま，ドアを開けることもなく，事情を話して断ることも出来たはずである。この新郎は思い遣りのある人であったのであろう。お人好しであったと言ってもよいかもしれない。"Stranger"と呼び掛けているが，普通の会話では有り得ないことであろう。名前を尋ねたりすればそれだけ断りにくくなると思って，距離を置こうとしている新郎の気持ちが表されていると考えられる。引用の２行目から４行目で新郎が天候のことを話しているのも，はっきり断ることが出来ない新郎の心の優しさを表すものであろう。ここに，フロストの表現上の技巧が感じられる。

３連目は次の通りである。

Within, the bride in the dark alone

Bent over the open fire,

Her face rose-red with the glowing coal
　And the thought of the heart's desire.
The bridegroom looked at the weary road,
　Yet saw but her within,
And wished her heart in a case of gold
　And pinned with a silver pin.

家の中では，新婦が独りで暗闇の中にいて
覆いのない炉の上にかがみこんでいた，
顔はバラのように赤かった，石炭の輝きのため，
そして心からの願いを思っているためであった。
新郎はうんざりさせる道を見たが，
目に映るのは家の中の彼女の姿だけだった，
そして彼女の心が金の箱に入れられ
銀のピンで留められていればいいのにと思った。

この引用でまず気になる箇所は，1行目の“in the dark”である。なぜ「暗闇の中」なのか。それは，明かりをつけていたら，見知らぬ人に泊めてもらえるかもしれないという希望を与えることになるかもしれないからであろう。しかし，炉の火までは消すわけにはいかない。寒いのである。次に気になる表現は“the heart's desire”「心からの願い」である。これは新婚初夜で男女として結ばれることを意味するのであろう。新婦はその事を思うだけでも顔がほてるというのである。この婉曲的な表現は，新婚初夜を迎える新婦の恥じらいと期待を，見事に伝えるものである。さらに，5行目の“the weary road”という表現にも注目したい。もちろん道路が疲れているという意味でなく，今の新郎にとっては道のことはどうでもよいことであろうが，見知らぬ人のことを思うと，「うんざりさせる道」ということになるのであろう。この表現から新郎の見知らぬ人への思い遣り，優しさを読み取るべきであろう。そして次の行には，新

郎の新婦への思い遣りがよく表されている。5行目で「道を見た」と言っても，それは物理的なことにすぎず，6行目では「家の中にいる新婦の姿だけを見た」と言って，心の目に映っていたものは家の中にいる彼女の姿だけだったと，彼女への思い遣りが示されている。最後に，この連の最終2行も，変わった比喩表現であるという点で注目に値する。この2行は，高価な金の箱に新婦の心が入れられ銀のピンで留められていれば，彼女に余計な心配をかけずに済むのにと，新郎が彼女に対して申し訳ないと思っていることを表現していると解釈することができる。金の箱と銀のピンという比喩によって，新郎が新婦の心をこの上なく大事に思っていることも同時に表現されている。フロストの機知と技巧に満ちた最も難解な比喩表現の一つと言ってもよいであろう。

4連目は以下の通りである。

The bridegroom thought it little to give
　A dole of bread, a purse,
A heartfelt prayer for the poor of God,
　Or for the rich a curse;
But whether or not a man was asked
　To mar the love of two
By harboring woe in the bridal house,
　The bridegroom wished he knew.

新郎は思った，
パンやお金をあげるとか，
神の子である貧者に心からの祈りを捧げるとか，
金持ちを呪うとかなら何でもないことだと，
だが新婚初夜の家に悩みの種を入れることによって
二人の愛を台無しにすることが
新郎にとって必要なことなのかどうかについては，

その答えが分かればいいのにと思った。

引用の 3 行目の“the poor of God”という表現には少し注意しなければならない。貧者は神の子であるということを意味しているのだが，新郎は，神が貧者のことを特別に気にかけていると思っているのであろう。見知らぬ人も自分も貧者の部類だと思っている新郎は，貧者のために心からの祈りを捧げるというのである。これも見知らぬ人への思い遣りを示すものであろう。引用の 4 行目で，対照的に金持ちへの反感が示されていることによって，新郎の，自分も含めた貧者に対する特別な思いが強調されているように思われる。そういう思いがあるからこそ，ますます，新郎は，見知らぬ人を放っておけず，思い遣りを示さずにいられないのであろう。また，5 行目の“was asked”は「頼まれている」という意味ではなく，「要求されている」という意味であろう。神の子であると思っている新郎にとって，今自分が置かれている状況は，神によって「要求されている」大事なことかもしれないのである。7 行目では，新郎が「見知らぬ人」のことを，“woe”「悩みの種」と言って，彼の率直な気持ちが吐露されているが，だからといって冷たい人間だと考えるべきではない。注意すべきなのは，引用の最終行である。2 連目にも“Stranger, I wish I knew”と同じ様な表現があったが，どちらも，それぞれ“Stranger, I don't know.”，“The bridegroom didn't know”と表現することもできたはずである。だがどちらもこのように表現されていないのは，新郎の戸惑い，心の優しさ，見知らぬ人に対する思い遣りが示されている証しである。

この詩について，Katherine Kearns は次のように指摘している。

> The poem brings the stranger to the door at twilight, and his burden is said to be “care.” He predicts by his presence that this newly married, happy couple will be visited often by Sorrow, who will soon no longer seem a stranger and who will, in time, be invited inside.[7]

Kearns はこの詩を象徴的に解釈しすぎているのではないだろうか。フロスト

（7）Kearns, 152.

は現実のありふれた日常について，日常の言葉を使いながらも意表をつく表現のしかたで語る詩人である。写実主義的な詩を象徴主義的に解釈するのはいかがなものであろうか。

V.

最後に取り上げたい詩は，“Locked Out”「締め出されて」である。この詩からも思い遣りの精神が溢れ出ている。この詩には“As told to a child”「子供への詩」という副題が付けられている。この詩は連に分けられていない 13 行から成る詩である。最初の 3 行は次の通りである。

When we locked up the house at night,
We always locked the flowers outside
And cut them off from window light.

私達は夜家に鍵を掛けるとき，
いつも花を締め出し
窓の明かりも花に当たらないようにした。

この詩は，副題の通り，“we”「私たち」すなわち，フロスト夫婦が自分たちの子供に対して話して聞かせているという設定で書かれている。おそらく，子供が，夜，花を外に置いたままにしておくようなかわいそうなことをしてはいけないと言ったのであろう。暗いのに窓の明かりも当たらないようにするなんてひどいというようなことも言ったのであろう。そのようなことを言う子供に対して，お父さんたちはいつもそうしてきたのだよと，フロストは言うのである。子供に対して，自分たちの習慣を，冷静に説明している。子供がつべこべ言うものではない，お父さんたちがやってきたことは正しいのだ，というようなことを言う親もいるであろうが，フロストは花のことを心配する優しい子供を思い遣っていると解釈することができよう。また，花にとっては，フロスト夫婦がしてきたことの方がよいことなのだが，そのようなことを言っていない

のも，子供にはそのようなことを理解する力がまだないと思い，子供の気持ちを尊重しようとするフロストの思い遣りからであろう。

次の 4 行は以下の通りである。

The time I dreamed the door was tried
And brushed with buttons upon sleeves,
The flowers were out there with the thieves.
Yet nobody molested them!

誰かがドアを開けようとして
ドアに袖のボタンが触れたという夢を私が見たときがあったが,
その時も花は泥棒達と共に外にいた。
しかし花は痛めつけられはしなかった！

子供が，泥棒が来たとき，花を外に置いたままにしていて大丈夫なのかと尋ねたのであろう。フロストは，子供に，花のことより家の戸締りの方がいかに大事なことであるかを理解させるために，子供の恐怖心をあおらないように，自分が見た夢の話として，実際に起こった話をしているように思われる。引用の 1 行目に“dreamed”とあるが, 実際は, 眠っていたのではなく, 目が覚めていて, 誰かがドアを開けようとしてボタンがドアに触れるような音が聞こえたのであろう。だが，フロストは，子供を怖がらせないように夢の話にしたと解釈できる。引用の 3 行目の“the thieves”の“the”は，子供が恐れている泥棒たちというつもりでフロストはつけたのであろう。ここにも，実際の話ではなくあくまでも夢の話であることを強調して，子供の恐怖心をあおらないようにしようとするフロストの思い遣りが現れている。

最後の 6 行は次の通りである。

We did find one nasturtium
Upon the steps with bitten stem.
I may have been to blame for that:

I always thought it must have been
Some flower I played with as I sat
At dusk to watch the moon down early.

階段に置いていた花の中で茎が噛まれている
一本のキンレンカがあるにはあった。
私が茎をかんだのかもしれない。
私はいつも思ってきたのだが
夕暮れに月が早く空の下の方に出ているのを見ようと
階段に坐っていじっていた花がそのキンレンカだったに違いない。

すぐ前の引用では，“nobody molested them”「花は痛めつけられはしなかった」と語られていたが，ここでふと思い出したように茎が噛まれたキンレンカが一本あったと語られている。フロストは正直な人だったのであろう。だが，実際は，子供を安心させるためにこのような話を作ったのかもしれない。子供はこの話を聞いて，茎を噛んだ父を責めるよりも，父親が花のことを忘れて魅了されたほどの月の話に感動したかもしれない。そして，窓の明かりがなくても月の明かりがあるのだと思って花のことを心配することはなくなったかもしれない。フロストの機知に富んだ思い遣りには全く驚かされる。

Ⅵ.

この小論では，フロストの思い遣りが表わされている詩を，5篇取り上げて考察してきた。“My November Guest”では，寂しい風景を愛する恋人に対する詩人の思い遣り，“To a Moth Seen in Winter”では，冬の蛾に対する思い遣りを読み取ることができた。また，“The Thatch”では，鳥に対する思い遣り，昔住んでいた家への思い遣り，“Love and a Question”では，新郎の新婦に対する思い遣り，新婚初夜に訪れた見知らぬ人への新郎の戸惑いながらの思い遣りが語られていた。最後に扱った“Locked Out”では，花のことを心配する

子供に対する思い遣りが，機知に富んだ手法で表されていた。

このように，フロストは，5 篇の詩を通して，人生あるいは人間社会において，とかく忘れられがちな思い遣りの気持ちを持つことがいかに大事であるかを教えてくれている。